

私がウズベク語を初めて意識したのは一九九四年に訪れた中国の新疆ウイグル自治区においてだったと思う。私は当時経済学を専攻していた日本の大学を休学中で、旅行と語学学習を兼ねて新疆に三か月間の滞在中だった。

場所は中国は新疆の西端、塔吉克^{タジク}自治区のタシコルガン（下の地図でカシユガルの南方）。ある旅籠^{はたご}に投宿して二週間が経っていた。

滞留しているのは私だけ。宿泊客もウイグル人か漢人が日に一人か二人来るだけだ。彼らは日没後に着いて翌日の早朝には発つので、旅籠にはたいていの場合、塔吉克人の雇われ帳場番と私しかいない。そこで、私達は宿直室で茶を飲みつつ縫い物をしたり話をしたりしていることが多い。つた。

その日も宿直室で（高地で水の沸点が低いため）ぬるいお茶を二人で飲んでみると、日が暮れてからウイグル人の客が旅籠の扉を叩いた。中国製の雑貨をパキスタンやウズベキスタンに持ち出して売っている商人だという。お茶を勧めると、彼は腰を下ろし、商売で行ったまちについて話し始めた。

「ウズベキスタンに初めて行った時は驚いたよ、あそこの人たちはみんなウイグル語を話すんだ！」

ウズベキスタンで広く話されており、ウイグル語とよく

ことばというパスポート

40



似ているこの言語が、実は本稿の主題であるウズベク語だった。もつとも、そのときの私達の反応は「へえ」と「ふうん」だった。

*

商人が言ったように、ウズベキスタン国内で主に話されている言語は、ウイグル語によく似ているチュルク諸語の一つ、ウズベク語だが、ウズベク語以外にタジク語、カザフ語、カラカルバク語などを含む多数の言語が話されている。

何世紀にもわたって中央アジアにすむ集団の言語の他

に、旧ソ連諸国からの入植や、スターリン時代の強制移住の結果ウズベキスタン内に形成された集団の言語までを考慮に入れれば、ウズベキスタンの言語状況の複雑さは倍増する。現在主に何語を話しているのか不明な集団もある。さらに、それぞれの言語内の変異も多い。例えば、タジク語とされる言語の中にも、地理的に分類される方言の他に、イランから移住してきたとされる集団やユダヤ人などのものには独自の方言に分類されるものがある。

ウズベキスタンの言語は多様の極だ。

ウズベク語を学ぶものは、この多様性と無縁ではいられない。首都であるタシケントで学べば、ロシア語の権威が

ブハラの人々とブハラで

[Uzbek]

ウズベク語

いど しんじ
井土慎二

未だ強いことを知るだろうし、第二の都市たるサマルカンドに学べば、そこがタジク語圏内であることを実感するだろう。ウズベキスタン領内の古の城郭都市、ブハラで学んだ私も、後述するように、言語の多様性のただなかにおかれることになった。

*

ブハラは二〇〇年を超える歴史を持ち、中央アジアにおけるイスラーム王朝の魁^{きまがけ}、サーマーン朝(八七五-九九九)の首都でもあった。まさに中亜随一の古都とよばれるにふさわしい城邑だが、私がブハラに向かった理由はその歴史にはなかった。私の親友がブハラ出身であり、彼の尽力でブハラ大学で受講する手はずが整ったことが理由だった。

彼がウズベキスタンに召還されるまでは、彼と私はともにトルコのイスタンブールで学ぶ学生だった。私のウズベク語学習を好機として、私たちは彼の故郷であるブハラでの再会を期したのだった。この帰結として、私のブハラでの居候先も、広い中庭を持つ、彼の叔母宅に決まった。

彼と無事に再会を果たし、次々に現れる彼の親戚や友人の名前も覚えきれないうちに、ブハラ大学ではウズベク語特講が始まった。生徒が私人しかいないところに数人の講師がつき、毎日四時間の講義が続いた。

旅立つ前に

【学習情報】

〈講座〉 大学書林国際語学アカデミーと日本ウズベキスタン協会がそれぞれウズベク語講座に生徒を募集している。朝日カルチャーセンターなどで講座が組まれることもあるようだ。

〈辞書〉 日本語で本格的な学習に耐えるウズベク語辞書は筆者が知る限りないが、英語では *Uzbek-English dictionary/compiled by Natalie Waterson*. Oxford; New York: Oxford University Press, 1980 が使える。ただし採録された語数は少なく、使用頻度が高い単語がぼっかり抜けていることがある。ウズベキスタンの独立後に以下のような辞書が

でたが、未見のため評言は差し控える。*Uzbek-English, English-Uzbek dictionary/Kamran M. Khakimov*. New York, NY: Hippocrene Books, 1994 と *Uzbek-English dictionary/Karl A. Krippes*. Rev. ed. Kensington, Md.: Dunwoody Press, 1996。これらの他に二言語辞書ではロシア語やトルコ語辞書があり、もちろんウズベク語の一言語辞書もあるが、これらは入手が容易とはいえない。しかし、トルコ語を既に知る学習者は土烏/烏土辞書を手に入れると楽である。英語を経由するよりよほど解りやすい。もっともトルコ語を逐一ウズベク語に置き換えるとかなりおかしな表現になるので注意が必要。1994年に Türk Dünyası Araştırmaları Vakfı より出版された Berdak Yusuf と Mehmet Mâhur Tulum 共編によるものがかさばらず使いやすい。辞書というよりは製本された語彙対照表という趣が強い。1993年にウズベキスタンで先に Бердак

Юсуф 単編としてほぼ同内容で発売されているが、購入の際は落丁に注意。

〈教科書〉 日本語で使用に耐えるものは筆者の知る範囲ではない。英語によるものとしては Khayrulla Ismatulla 著 Walter Feldman 編 *Modern Literary Uzbek I-II* が 1995 年にでている。<http://languagelab.bh.indiana.edu/uzbek.html> に音声ファイルがある。他には未見だが 1994 年の Kurtuluş Öztopçu 著 *Colloquial Uzbek: A Mini Course* (Guilford, CT: Audio-Forum) や 2 巻から成る 2002 年の András J. E Bodrogligeti 著 *Modern Literary Uzbek. A Manual for Intensive Elementary, Intermediate, and Advanced Courses* (Lincom Europa) がある。

【日常会話】

汎イスラム圏のアラビア語の挨拶 アッサラーム アライクム assalomu alaykum! が使われる。この挨拶に対しては ヴァ アライクム アッサラーム va alaykum assalom! が返される。日常的な付き合いではよりくだけた形である サラーム salom! に多く接するだろう。ブハラでは アッサラーム assalom! もよく聞かれる。因みに（日常的に接しているものの間でも）握手はよく行われる。カライ イシラルングズ カライ Qalay ya ishlaringiz qalay が「ご機嫌いかが?」。返事は例えば yaxshi 「いいです」や yomon emas 「悪くないです」。「どうしました?」は ニマ ボルディ nima bo'ldi?。「さようなら」は ハイル xayr! になるが、ブハラでは ソー ボリン sog' bo'ling! がよく聞かれる。「すみません」は ケチラスイズ ウズル kechirasiz と ソライマン uzr (so'rayman)。後者のほうが謝罪する感じが強い。「有難う」は ラフマット rahmat!。現在の正書法はキリル文字ではなく ASCII のラテン文字を使う。

しかし、二、三週間が経った頃、私は当初予定していなかった講義を採ることに決めた。大学のタジク文献学講師に頼み、ウズベク語講義にさらにタジク語講義を付け足したのだった。

これには理由があった。プハラはウズベキスタンの中でもタジク語話者が特に集中している都市だ。よって、教室の外ではウズベク語はあまり聞かれない。私が居候していた家が旧市街の真ん中に位置していたこともあるだろうが、私の日常はタジク語のプハラ方言の世界だった。

プハラでは通常、その場にウズベク語話者がいる場合は、会話はウズベク語になる（もともと、タジク語の慣用表現のウズベク語への逐語訳などはよく混じる）。私の居候する家の拡大家族には朝市場で仕入れた野菜を持ってきてくれる親類がいたが、彼はもともとプハラ市外のウズベク語を話す集落の出身なので、彼がいる際はウズベク語が話される場合が多かった。しかし、彼自身も長年のプハラ旧市街暮らしでタジク語に親しんでいるし、旧市街育ちの彼の娘の母語はタジク語となっている。

つまり、私の日常はやはり圧倒的にタジク語のプハラ方言の世界だった。

しかし、書面によるやりとりは、プハラ人父子の間でさえウズベク語になりうる。ウズベク語は書き言葉として標

ことばというパスポート④ ウズベク語 ←

準化された形を学校で教わっているためだ。こういった状況で学習したウズベク語のため、私のウズベク語は書き言葉に重心が偏っている。しかし、私のプハラにおける学習は、多言語国家ウズベキスタンにおいて国家語という地位を付与された言語としてのウズベク語を理解するという意味では、かえって良かったとも思う。

なによりも、プハラで大家族の一員となって濃密な人間関係の網の一結節として過ごすことは何にも代えがたい経験だ。この人間関係の網は時としてウズベキスタンの国境を越える。現在私が住むシドニーにおいてさえ、プハラ旧市街出身の友人とチャイ代わりのカプチーノを片手に閑談に費やす時間は多い。

新疆のタシコルガンでのウズベキスタンとの邂逅から十年が経つが、私のウズベキスタンとの関わりはこれからも続きそうだ。

現在ウズベキスタンの政治や経済の状況は良いとはいえない。かの国の政治と経済がその国民にとってより望ましいものになることを祈りつつ筆を擱く。

【注】

塔吉克はこの自治県の民族の自称。自治県内の塔吉克人の大部分は（タジク語ではなく）パミール語に属するサリコリ語を話す。

（シドニー大学／言語学）